

青年・成人・高齢者を対象とした「居場所」に関する横断的研究
人は何に場の快適さを感じるのか

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
稲生 ゆみ子

1990 年代以降不登校児の居場所作りが活発化し、「居場所」が注目され始めた。近年では不登校児だけでなく、高齢者の居場所作りが行われている。しかし、一言に「居場所」といっても様々な意味があり、居場所を作る場合には、その場に居る人が「快適」と感じるかが重要と考える。高齢者の居場所作りが行われる一方、居場所研究は少なく、成人に至っては調査も研究もほとんどされていない。本研究の目的は、居場所の心理的機能とする「場の快適さ」に着目し、青年期から高齢期までの場の快適さの変遷を明らかにすることである。そのため、青年、成人、高齢者を対象とした横断的な研究を行うこととする。男女 386 名（青年は 18 歳～25 歳の男女 141 名、成人は 35 歳～45 歳の既婚男女 125 名、高齢者は 65 歳以上の男女 116 名）を対象に質問紙を実施した。

因子分析の結果、「一人のくつろぎ感」「被受容・承認感」「やりがい感」「つながり・役割感」「肯定的評価」の 5 因子が抽出された。各因子の平均得点を算出し、世代で比較を行った結果、青年は全ての因子で高齢者よりも得点が高く、成人は「一人のくつろぎ感」「やりがい感」で高齢者よりも得点が高かった。高齢者においても「やりがい感」は比較的高い得点を維持していた。個人要因と場の快適さ因子との関連について重回帰分析を行い世代で比較を行った結果、青年は個人要因からの影響が少なく、成人と高齢者は複数に影響を与えていた。一方、各因子と否定的場面項目で相関分析を行った結果、青年と成人は複数の因子で負の相関が認められたが、高齢者は数個の正の相関が認められたのみだった。

これらの結果から、世代によって場の快適さの程度や影響する要因が異なっていることが明らかとなった。青年期は、世代の中で最も得点が高かったことから快適さへの欲求が高いと考えられた。また、場の快適さには個人要因からの影響よりも否定的な場面からの影響があり、得点が高い人ほど否定的場面を不快に感じていたといえる。高齢者は、個人要因からの影響が他の世代よりも多く、強いことが明らかとなり、日常に即した快適さを感じていることが示された。否定的場面では他の世代とは異なり、否定的に捉えていない人が増加すると思われた。成人期は、青年と高齢者の両方の特徴が混在していた。最後に、場の快適さは得点の高さの善し悪しを問うものではなく、その個人の生活に合わせた視点で快適に過ごせるかが重要である。「居場所」作りを行う際には、様々な個人要因を持つ人が選択できる場があることが必要と思われる。